

運命をよくする 善き言葉づかい



コトバとは何であるか

ヨハネ伝には「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」とあります。そして一切のものが言によって造られたと書かれています。それでは言とは一体何であるかと云いますと、宇宙の太初には無論肉體人間は存在しませんから、人間の唇から出る言葉でないことは明かであります。これは宇宙に満つる霊の振動であり、生命の活動であります。宇宙大生命が波動を起した(大生命は生きているから動くのであります)。し



かし物質はまだ顕れていないから物質の形では動くことが出来ない。そこで心で動くのであります。心で動くこと云うのは「想念の波」を起すと云うことであります。丁度ラジオの波のように宇宙一ぱいひろがった想念の波が起るのであります。ラジオの波は電波のままでは吾々に聞こえませぬけれども、既にコトバであるのであります。その電波がやがて吾々の耳に聞える波動(スピーカーの音)となったり、眼に見える形(テレヴィジョン)となったりして顕れて来ますように、宇宙に満つる大生命の波動が想念即ちコトバであって、それがやがて形の世界にあらわれて来るのであります。だから事物の本質

とは何であるかと云うと、此のコトバでありまして、形ではないのであります。ラジオの声の本質は電波であつて、形ではないのと同じであります。そこで事物の本質はコトバであるから、吾々が素朴な心になつて事物に接するとき、その事物のコトバ通りの発音を自然に発声し名づけたくないのであります。例えば雨がシトシトと降るとか、小便をシーと言うとか、水気を含むことをシメルとか云う風にであります。だからコトバで名づけると云うことは、その物の本質を表現するのであつて、たんなるAでもBでも好いと云うような符牒ではないのであります。だから人間の自然発声のコトバは、事物の本質を自然に表現していることになります。人間のコトバが事物の本質を表現していると云うことになりますと、人間が言葉を出すと云うことはラジオ・セットがある波長を起すのと同じことで、宇宙に満ちているコトバの活動を其の位置に於いて感覚世界に発現することになるのであります。だから、苟も、悪しき言葉を発言すると云うことは慎まなければならぬのであります。

(新版『真理』第4巻185〜186頁)



動作を丁寧に、表情を深切に

運命をよくするには常に善き言葉を使い、身体からだの動作を深切丁寧しんせつていねいにしなければなりません。丁寧にお辞儀じぎをしたら損そんをするとか、自分が相手より下のものだと思われて恥はづかしいとか考へるのは間違まちがひです。世の中の人、表情や身体からだを深切丁寧にする人をおかえて、「あの人は偉い人だ」と賞ほめるのです。これに反して「あいつは馬鹿だ、ろくろく言葉の使い方も知らない、お辞儀をする術すべも知らない」と言つて人から軽蔑けいべつせられるのは、言葉使いのぞんざいな人や、身体からだの動作に深切しんせつがあらわれない人です。こんな人の運命はよくなりません。

(『人生読本』262頁)

一寸したことちよつとで人間の運が変る

世の中には学問も良よくでき、立派な才能を有もちながら、運が悪くて、勤め先つとをあちらへ更かわり、こちらへ更かわり、

しまいには落ちぶれて働く先もなくなるような人があります。そんな人はたいいてい、気が短くて、言葉使いに深切がなく、身体の動作に礼儀正しさのない人です。

礼儀作法は女だけの習うものではありません。礼儀作法は男にも必要です。人間の値打を智慧や学問ばかりにあると思うのは間違です。尚それよりも態度の優美ということは、何よりも必要な人間の値打です。最初はこういう態度が美しいかは、鏡を見て稽古をなさるのもよろしい。どの程度に微笑する事が相手に気持のよい感じを与えるか、十分研究して置いて相手に快い気持を与える稽古をなさい。「そんな話らないことを研究するよりも、本を読む方が偉くなる」とお考えになるかも知れませんが、しかしあなたがいくら偉くなっても、姿態はあなた自身の玄関のショーウインドーです。ショーウインドーが埃だらけでは、いくら家の中に上等の品物があっても、中まで入って買ってくれないでしょう。あなたの中味の値打がどれほど偉くても、言葉態度が下手では、その中味の値打を出す時が来ないのです。中味はどんなに美しい御馳走でも、泥まみれにしたら誰でも食べ手に



がないでしょう。せっかく立派な才能を有ちながらも、言葉態度に深切丁寧さがなくては、せっかくのよい御馳走を泥まみれにして出すのも同じことです。

〔「人生読本」265～266頁〕

「形」と共に「心」を深切にせよ

と言って、言葉態度の美しさは形ばかり真似ても、真似ないよりはよろしいが、それだけでは本当に言葉態度が良くなりません。心に気品を持ち、心に優しさを持ち、心に深切を本当に持たないで、言葉や形ばかりを真似たのでは、どうしても嘘らしい空々しさが見え透いて人が感心するものではありません。何よりも必要なのは本当に深切な心持です。「あの人によい思いをさせてあげたい、あの人をよい気持にさせてあげたい、どんな人にも不快な気持をさせたくない。」こういう気持を持つように日々心掛けておれば自然に言葉態度が優しく深切に、誰にとっても気持がよくなれるのです。

〔「人生読本」267頁〕